

編 集 後 記

平成25（2013）年は、歯学会員の皆様にとりまして、どんな年だったでしょうか。異次元の金融緩和に始まったアベノミクスにより、日本経済は久しぶりに明るさを取り戻しつつあるようです。「じぇじぇじぇ」「今でしょ！」「お・も・て・な・し」など、流行語も笑顔と躍動感を含み、ロゲIOC会長の「TOKYO 2020」で大いに盛り上がりました。残念ながら村上春樹氏は今年もノーベル文学賞をのがしましたが、医学・生理学賞に膜融合タンパク質「SNARE」の研究者が選ばれ、同学の徒としては記憶に残る年となりました。ただし、浮かれ気分もここまで、キャロライン・ケネディ大使の着任を待っていたかのように、突如「防空識別圏」を重ねてきた巨大な隣国と一触即発の危機です。来年の日本がどうなっているか、とても心配です。

さて32巻2号の巻頭総説として、東城教授に大河の流を彷彿とさせるライフワーク「唾液腺におけるストア作動性Ca²⁺流入の活性化機構」を執筆して頂きました。岩清水のように滴り流れ出た研究の源流は、大小の滝や急流を下り、左右に大きく蛇行しながら、赤い夕日に染まる河口で静かに海と融合し、みごとに完結しました。奇妙な説だなと思いつつ、堤防の土手からこの大河を親しく眺めていた者の一人として、きわめて感慨深いものがあります。今後も、諸先生の貴重なライフワークを巻頭総説として掲載させて頂きたく、ご投稿をお待ちしております（田隈記）。

次号（第33巻、第1号）の発行は平成26年6月30日です。

投稿原稿募集の締め切りは平成26年3月31日必着と致します。期日厳守の上、ご投稿をお願いします。本誌投稿規定は、2013年第32巻、第2号の巻末をご参照ください。